

# 令和6年度 県南教育事務所重点施策に関する調査結果について (中間まとめ)

## 学校教育課通信

令和6年12月4日 第205号

編集・発行：県南教育事務所 橋本美弥子

令和6年度中間調査(10月末時点)へのご協力ありがとうございました。各校・各園から挙げられた成果と課題の一部を御紹介いたします。自校・自園の取組と比較しながらご覧いただき、今後の計画の充実・改善に生かしていただきたいと思います。最終調査は2月末に行う予定です。(○成果 ▲課題(今後に向けて))

1 資質・能力の育成と学力向上 (数値目標3.5)		小学校	中学校	
1	学校としての学習指導の方向性の確認	授業改善の視点や授業周辺部の取組(家庭学習の方法等)について、共通理解を図る場を設定し、実施している。	3.5	3.6
2	全国学力・学習状況調査	全国学力・学習状況調査の問題を解いたり、自校採点したりする機会を位置づけ、実施している。	3.6	3.2
3		全国学力・学習状況調査結果から、児童生徒の課題等、学力・学習状況を把握している。	3.6	3.5
4		全国学力・学習状況調査結果分析を受けて、自校の課題解決に向けた学習指導の充実・改善に具体的に取り組んでいる。(年間指導計画や日課表、週月案、学習指導案等への適切な反映、校内研修計画の修正・改善等)	3.3	3.1
5	ふくしま学力調査	ふくしま学力調査結果から、児童生徒一人一人の学力の伸びを把握している(分析ツールを活用するなどして)。	3.1	3.4
6		ふくしま学力調査結果から、非認知能力や学習方略等の実態を分析し、把握している。	3.1	3.1
7		ふくしま学力調査結果から、伸びの見られた学年・学級・児童生徒等の要因やよい取組を職員間で共有している。	3.0	3.1
8	エビデンスに基づく授業改善	各種調査結果分析・検証の結果について、学校全体で共有し、調査実施学年以外の学年や調査実施教科以外の教科等の指導改善等を行っている。(2月調査のみ)		
9	主体的・対話的で深い学びの視点での授業充実・改善	学習指導要領に基づいて目標、指導内容を資質・能力の3つの柱で捉え、単元(題材)及び本時のねらいを設定し授業を構想している。	3.3	3.2
10		ふくしまの「授業スタンダード」に基づき、主体的・対話的で深い学びの視点を取り入れた授業の工夫・改善に努めている。	3.4	3.5
11		各種調査結果において課題の見られた点を中心に、校内研修等を適切に実施している。	3.4	3.1
12	カリキュラム・マネジメントの確立に向けて	各種調査結果分析をもとに取組を検証し、次年度のグランドデザインや現職教育(校内研修)計画等に適切に反映させている。(2月調査のみ)		
13	資質・能力の育成を支える基盤づくり	教師自身の言語環境を整え、指導技術を高めるとともに、聞き方や話合いの仕方などを習得させ、学び合う集団づくりに努めている。	3.2	3.1
14		教科等の目標や内容を見通し、言語能力、情報活用能力(情報モラルを含む)、問題発見・解決能力等求められる資質・能力の育成のために、教科等横断的な学習を充実している。	3.1	2.9
15		幼・小・中・高の学びの円滑な接続を意識した取組(架け橋期カリキュラムの作成・実施・改善、異なる校種間での対話の機会等)を行っている。	3.3	2.9
16		自己マネジメント力の育成に向け、基本的な生活習慣や家庭学習習慣の確立や充実のための取組を行っている。(ふくしまの家庭学習スタンダードを指針とする等)	3.3	3.2
17		ふくしま活用力育成シートや全国学力・学習状況調査問題(授業アイデア例や、『一発検索くん』)を、授業や校内研修において活用できるよう環境整備をしている。	2.9	2.6
追加質問	授業改善グランドデザインについて(R6年8月発行)	「課題克服のための授業改善3つのポイント」を活用し、教師が「話す」授業から、教師が「みる」「きく」「つなぐ」授業への転換を図るために、すべての子どもが「学び出す」「学び合う」「学びとる」授業へ改善を進め、授業改善チェックリストを活用している。	3.0	2.8
成果と課題	<p>○全職員で全国学力・学習状況調査の問題を解き、自校の課題を分析して、指導の改善に活用している。(小学校)</p> <p>○ふくしまの授業スタンダードを基に、本校での授業づくりにおける共通実践事項を決めて授業づくりに取り組んでいる。(小学校・中学校)</p> <p>○返事、あいさつ、姿勢など学習の基盤づくりに取り組んだことで、授業に真剣に向き合えるようになり、学力向上に効果的であった。(小学校)</p> <p>○タブレット端末を個別添削に活用したり、授業で活用したりするなど効果的な活用を進めている。(中学校)</p> <p>○日常生活と関連付けた学習指導、同僚性を生かした校内研修、テストに取り組む姿勢の指導が、学力調査の正答率向上につながった。(中学校)</p> <p>▲習熟の時間の確保や振り返りの時間の充実を図ることができるようにしたい。(小学校・中学校)</p> <p>※「授業改善グランドデザイン」の「課題克服のための授業改善3つのポイント」については、各学校の活用に見られる。今後、教育事務所として要請訪問、スキルアップ訪問等で周知を図り、各校での活用が進むようにしたい。(県南教育事務所)</p>			

2 生徒指導と道徳教育の充実 (数値目標3.5)			評価平均		
			幼稚園	小学校	中学校
(1) 一人一人が安心して学べる授業づくり・居場所づくり	①	不登校児童生徒を新たに出さないように予防に努めるとともに、不登校児童生徒に対しては個別の支援計画を作成し、組織的に対応をしている。	/	3.4	3.4
	②	いじめの未然防止、見逃しゼロに向けた組織的な対応と児童生徒一人一人が主体となって活躍できる魅力的な学校・学級づくりに努めている。	/	3.6	3.5
	③	児童生徒のニーズに応じた心のケアのため、保護者やSC、SSW、関係機関と連携し組織的に対応している。	/	3.6	3.7
(2) 道徳教育の充実	④	道徳教育推進教師を中心として、道徳教育全体計画「別業」の活用を図り、学校・家庭・地域と一体となった組織的な道徳教育を推進している。	/	3.1	3.0
成果と課題	<p>○生徒指導提要の改訂点について校内生徒指導会議で確認をし、発達支持的生徒指導・課題未然防止教育を全職員で行っている。(小学校)</p> <p>○生徒指導案件について、学年に関わる教職員(学年チーム)、担任外の教職員、管理職による組織的な対応で早期解決を図ることができた。(小学校)</p> <p>○生徒指導主事を中心に組織的に対応し、学年をこえて学校全体で取り組んでいる。(中学校)</p> <p>○SSR(校内教育支援センター)を効果的に利用し、クールダウンを図りながら教室で活動できる生徒や出席が増えた生徒がみられた。(中学校)</p> <p>▲道徳教育における別業の活用や、家庭・地域との連携の計画が十分に練られなかったことが課題である。(小学校)</p> <p>▲教師の見えないところで発生するSNS関係の指導が難しい。家庭での使い方の指導までは踏み込みきれず、後手後手に回った指導にしかならず、予防的な指導が難しい。(中学校)</p>				

3 健康マネジメント能力の育成 (数値目標3.5)			評価平均		
			幼稚園	小学校	中学校
(1) 体力の向上と運動習慣の定着	①	【幼稚園】「幼児期運動指針」を踏まえ、主体的に体を動かす遊びを中心とした身体活動を生活全体の中で確保している。 【小・中学校】「ふくしまっ子児童期運動指針(小)や「体力向上推進計画書」(小・中)を踏まえながら、全職員で共通理解を図り、取組を行っている。	3.3	3.3	2.9
(2) 食育の推進	②	【幼稚園】園全体で組織的に食育に取り組んでいる。 【小・中学校】「食に関する指導の全体計画」に基づき、組織的に食育に取り組み、食育の授業を実践している。	3.3	3.6	3.5
(3) 健康の保持増進を図る保健教育	③	自己の健康課題解決のために、自分手帳を活用している。	/	3.4	3.2
成果と課題	<p>○コーディネーショントレーニング、サッカー教室、マラソン等を行い、体を動かす楽しさを味わわせながら、体力向上につなげている。(幼稚園)</p> <p>○図書コラが給食や給食センター見学をおして、食や食材への関心が高まった。(幼稚園)</p> <p>○食に関する指導の充実が家庭との連携の深まりへとつながり、児童の健全な成長へと大きくつながっている。(小学校)</p> <p>○自己の成長の記録や健康状態、食事等について、自分手帳の定期的な活用により、自身の体について関心が高まった。(小学校、中学校)</p> <p>○給食センター、栄養士との連携を密にし、町全体で食育を推進している。(中学校)</p> <p>▲児童の肥満度を減らすための具体的な手立てが不足している。(小学校)</p> <p>▲健康マネジメント能力の育成のための積極的な活用方法が課題である。(小学校)</p> <p>▲生徒、保護者の意識向上を目指した外部機関との連携が課題である。(中学校)</p> <p>▲歯科受診率の低下が課題である。(中学校)</p>				

4 特別支援教育の充実 (数値目標3.5)			評価平均		
			幼稚園	小学校	中学校
(1) 多様な学びの場の充実・整備の推進	①	各種訪問や特別支援学校のセンター的機能による支援を積極的に活用し、計画的に校内(園内)研修を行うことで、特別支援教育の理解推進と教員の専門性の向上に努めている。	3.5	3.1	2.9
	②	交流及び共同学習の実施にあたっては、幼児児童生徒の個別の教育支援計画や個別の指導計画を活用し、担当者間で指導目標や指導内容、個に応じた支援について共通理解を図り、実態に応じた指導を行っている。	3.7	3.4	3.2
(2) 切れ目のない支援の充実	③	「個別の教育支援計画作成・活用啓発リーフレット」を活用し、計画の作成及び引継ぎ・活用の意義について保護者の理解を促すとともに、本人・保護者の同意と参画に基づいた個別の教育支援計画の作成に努めている。	3.6	3.4	3.2
	④	幼児児童生徒にとって必要かつ適切な支援が切れ目なく提供されるよう、個別の教育支援計画の記載内容を定期的に評価・改善し、進級時や進学先に引き継いでいる。	3.8	3.6	3.5

成果と課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>○計画的なケース会議を実施し、職員間で共通理解を図りながら保育を行う等、園内支援体制の構築に努めている。(幼稚園)</li> <li>○保健福祉部局や保護者との連携により、個に応じた保育や進級、就学に向けた支援体制が整備されている。(幼稚園)</li> <li>○センター的機能を活用し、計画的に校内研修を実施することで、特別支援教育の理解推進を図ることができた。(小学校、中学校)</li> <li>○特別支援学校との交流学習により、集団における学びをとおした心の成長が見られ成果を感じている。(小学校)</li> <li>○特別支援学級の設置がないため、支援員を有効活用し、昼休み等に学習支援を行うことで、学力向上につながっている。(中学校)</li> <li>▲支援を要する幼児の保育についての共通理解を図る時間をもっと必要である。また、園内研修の時間の確保が難しい。(幼稚園)</li> <li>▲個別の支援の有効性を説明しても、保護者の理解を得ることが難しく、就学に向けた医療機関との連携が難しい。(幼稚園、小学校)</li> <li>▲特別支援教育を充実させるための教職員の専門性の向上が課題である。(小学校)</li> <li>▲今年度は校内研修を1度しか実施できなかったが、次年度は2回以上の研修機会を設けたい。(中学校)</li> <li>▲支援を要する生徒が多く、全ての生徒に支援が行き届かない。全教科でITを実施したい。(中学校)</li> </ul>
-------	--

5 学校教育を支える基盤の確立 (数値目標3.5)			評価平均		
			幼稚園	小学校	中学校
(1) 教職員の服務・勤務の確立と適正な人事管理	① 教職員人事評価について、全教職員が理解し、適切に運用している。	3.7	3.7	3.4	
	② 教職員組織を生かして働き方改革を推進し、職場環境の改善に努めている。	3.1	3.4	3.2	
(2) 学校事故防止の徹底と不祥事の絶無	③ 校内服務倫理委員会に、工夫改善を加え、効果的な取組としている。	/	3.4	3.3	
	④ 「信頼される学校づくりを職場の力で」を活用している。	/	3.7	3.6	
(3) 地域と共にある学校づくりと関係機関との連携強化	⑤ 地域住民・保護者が、学校(園)の経営方針について理解できるよう広報に努めている。	3.4	3.6	3.3	
	⑥ 学校評価を適切に行い、その結果を公表している。	3.8	3.7	3.4	
	⑦ 学校運営協議会等による学校、保護者、地域の連携促進に努めている。	3.5	3.6	3.6	
成果と課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>○学校運営協議会の運営により、地域や小学校との連携を密にできている。(幼稚園)</li> <li>○地域学校協働活動推進員が、地域と学校の間を調整し、地域と学校が円滑に協働できている。(小学校)</li> <li>○学校運営協議会と生徒会役員との意見交換会を実施し、協働する行事等について話し合いを行った。双方にとって大変有意義なものになった。(中学校)</li> <li>○超過勤務時間削減について、退勤予定時刻の可視化を行うことで改善が見られてきている。(小学校・中学校)</li> <li>○服務倫理委員会で自校の職員が体験したヒヤリハットの事例を共有し協議を行い、自己の客観視につながった。また、同僚生を高めるためにも役立った。(小学校・中学校)</li> </ul>				

6 幼児教育の充実と幼小連携の推進 (数値目標3.5)			評価平均		
			幼稚園	小学校	中学校
(1) 幼児の主体的な活動としての遊びの充実	① 幼児が身近な環境に主体的に関わり試行錯誤したり考えたりする遊びが連続・発展する環境構成や教師の関わりを工夫している。	3.5	/	/	
(2) 幼保小連携の取組の推進	② 幼小の教育のつながりを踏まえ、架け橋期のカリキュラム(小:スタートカリキュラム、幼:アプローチカリキュラム)を編成し、実施している。(1月は評価・改善している。)	2.9	3.4	/	
	③ 幼稚園、小学校間で、相互の教育の内容や方法に関して話し合う機会(計画)を設定している。※合同研修会、就学時や入学時等の対話等を含む	3.4	3.4	/	
	④ 【幼稚園】「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を具体的な姿で捉え、研修や交流の機会等で子どもの姿を共有するように努めている。 【小学校】「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連を踏まえ、生活科を中心に合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定を工夫している。	3.3	3.2	/	
成果と課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>○幼児教育の充実を図るために、記録を取りながら実態把握に努め、日常の保育指導に活用している。(幼稚園)</li> <li>○計画的に幼児と児童の交流を行い、幼小の連携を図っている。(幼稚園)</li> <li>○幼小で授業を参観したり、保育の様子を観察したりすることで情報を共有する場が増えた。(幼稚園、小学校)</li> <li>○学校運営協議会や幼・保・小の合同会議での情報交換によって連携を図ることができた。(幼稚園、小学校)</li> <li>○スタートカリキュラムを教育課程に位置付け、新1年生がスムーズに小学校生活になじむことができるよう、接続に配慮している。(小学校)</li> <li>▲アプローチカリキュラムやスタートカリキュラムの作成において、幼稚園・小学校の学びを踏まえた教育内容の充実が課題である。(幼稚園、小学校)</li> <li>▲幼稚園との連携を、管理職、低学年担任から全教員へと広げたり、幼小の学校運営協議会の形を検討したりするなど、教師間の連携を深める工夫が必要である。(小学校)</li> </ul>				